



児童文学の周辺

叢書児童文学第5巻

鶴見俊輔 責任編集

世界思想社

児童文学の周辺

叢書児童文学第5巻

鶴見俊輔 責任編集



世界思想社

叢書児童文学第五卷
児童文学の周辺

定価一九〇〇円

一九七九年四月二〇日初版発行

責任編集 鶴見俊輔

発行者 高島国男

発行所 世界思想社

京都市左京区岩倉下在地町三〇三

電話代表〇七五―七二一―六五〇〇

振替京都二九〇八

東京支社 東京都千代田区神田神保町三一―一九

電話〇三―三三〇―二四八三

印刷共同印刷工業

製本 藤沢製本

装幀 平野甲賀

©1979 Shunsuke Tsurumi

検印停止 落し・乱丁本はお取替えください

1395-042405-3868

叢書児童文学第五卷 児童文学の周辺

はじめに

何かの規律は生きてゆくために必要だろう。しかし、規律の支配がゆきとどくと、今度は、生きてゆくことがむずかしくなる。

そういうそむきあう二つのものを、私たちの生活はかかえている。そして、そむきあう二つの力の中で、今（一九七九年の日本）では、規律の力がつよくなりすぎていると私は思う。

だが、子どもについて考えると、いやおうなしに、私たちは、生きることの根源にある混沌とむきあうことになる。

どういう混沌かをとらえようとすると、その問いかけが、自然に、今子どもにあたえられている規律をうたがう結果をうむ。

子どもは、おとなよりも自然に近く生きており、それがそのまま十分な規律になればいいのだが、なかなかそうもゆかない。そこで、もう一度、今の規律をなおすとか、子どもの中にある自然の傾向に何かをくわ

えるとか、いろいろの解釈をくわえることになるわけだが、どういふふうには、子どもの文化を論じるにしても、おとなの文化を論じる以上に、混沌たるものをよく見ることが必要になる。

ここにあつめた子どもの文化についての発言は、混沌をふりかえてみることから、今の日本文化を考えなおすというさまざまな試みである。その試みが、子どもの文化についてだけでなく、おとなの文化の方向にむかってすすめられてゆくようであつてほしいし、日本のおとなの文化も、そういう見方からの批判を必要としていると思う。

この本に論文を再録することを許してくださったかたたちに、御礼を申し上げます。

一九七九年二月八日

鶴見俊輔

目次

子どもの領域

大衆社会と子供たち 娯楽コミュニケーション産業を垣間みて

パパから生まれた

子供はなぜ自殺するか あんまり不幸だと自殺する子供もある

ランチとお子さまランチ

子どもの悲しみ

宮沢賢治 妹背を契るもの

のんのんばあ

子どものけんか

刺し貫かれる書物〈悪書論〉

嘘の豊かな世界

ソロモンの歌

子どもの歴史と子ども観の歴史から

「私」の発生

七ツ前は神様

七ツ前は神のうち

木島 始 9

足立 卷一 17

林 達夫 25

花田 清輝 35

副田 義也 38

矢川 澄子 44

水木 しげる 52

遠山 啓 62

紀田 順一郎 64

羽 仁 進 74

吉田 秀和 93

倉田 一郎 113

能田 多代子 121

大間 知篤三 122

日本児童思想史序説 子どもに影響をあたえたものを中心に

懐しの球友

地蔵盆

少年の理想主義について 『少年倶楽部』の再評価

戦争が生んだ子どもたち

徽章と靴 東京落日譜

「おそ松くん」まで 四分の一自叙伝

戦後史はキャッチボールから始まった

ベニヤの中から

児童文学への新しい提案

狩猟民の末裔

乙骨淑子

飛田穂洲

松田道雄

佐藤忠男

柴田道子

小沢信男

赤塚不二夫

寺山修司

河内 紀

黒川てるゆき

野本三吉

鶴見俊輔

解説

子どもの領域

大衆社会と子供たち

木島 始

娯楽コミュニケーション産業を垣間みて

何気なくラジオをきいていて、これまでもっとも衝撃的にわたしをひきずりこんだのは、子供の声のばあい、いたずらっ子たちが無心に遊び興じているのを隠しテープでとって、それが流されたときです。その生き生きした有様は、文字で再現するのを不可能と思わせるくらいで、すさまじい迫力とさえいえるでしょう。

子供たちがじぶんの作文や詩を朗読しているばあいや、先生や親に応答しているばあいとは比較にならないくらい、じぶんじしんの夢を追い、行動を楽しんでいるし、楽しもうとしているのです。つまり、子供たちには、子供たちの世界があり、それを容易に大人たちには開示してくれないし、大人はまた大人で幸か不幸か、みごとに自分自身の幼年時代、少年少女時代を忘れさって、なかに想い起しては感傷にふけてばかりいるひとがいたりする、といった具合です。

今日のように発達したラジオやテレビといったマス・コミュニケーションといわれる表現・伝達的手段と、子供たちとの関係を考えるばあい、第一に問題になるのは、送り手に子供たちを参加させようとさせまいと担当するひとたちの児童観でしょう。大人が子供たちの像をどのように考えているか、何らかの既成概念でもって、こうあるべきだという理想像や、せいぜいこんなものさといった固定像でまわしているばあいが、はなはだ多いのではないでしょう。

か。

こころみにどの番組を見ても聞いても、そこに、子供についての新鮮な発見をさせてくれるものはほとんどなく、かえって、それらをみたりきいたりしている子供たちの反応に、むしろ、われわれは驚きます。

冒頭にのべたテープの録音で、いたずらっ子たちが大人の存在を意識しないで、遊びに興じている声や響きから、本当に子供たちじしんのものである世界の一端がうかがわれる、とわたしは思ったのですが、やや似た方法で、子供たちをカメラに写しとった羽仁進はつぎのように書いています。

「子どもに存在を忘れてもらえるようになればよいのである。また、そのくらい彼らの生活の中にとけこんでしまわなければ、彼らの心理的な息づかいを感じとることはできないだろう。彼らが心の中のもの素直に表わして見せる決定的瞬間を待つためには、腰をおちつけなければいけないわけだ」（演技しない主役たち）。

既成の児童観にとらわれることで、逆に大人がじぶんの描いている子供たちの像を、たえず新しくつくりなおすことが必要だと、まず第一に考えられます。同じ文章で、羽仁進は、率直に、子供たちに接することで得たじぶんの驚きや発見を告白しています。

いままで述べてきたような最初の態度を、かりに記録的な方法と呼ぶならば、それ自身子供のためのものの創造から縁遠いようにみえても、子供についての大人たちの発見、固定した児童観の変改には、欠くことのできないものであるといえるでしょう。

もちろん、子供たちは、じぶんたちの日常生活を即物的に記録されたものだけを、みたりきいたりして満足してはいないでしょう。わたしが冒頭からのできたのもそういう意味ではありません。そうではなくて子供たちの世界、子供たちのリズムへの手がかり、子供たちの像の原型を見直すということのために、どうしても必要な過程であり方

法であると思ったためです。

語りものにせよ、印刷される童話や小説にせよ、ラジオ・テレビの子供番組にせよ、子供たちの存在と世界の独自性、そのリアリティをとらえたものでなければ、成長する子供たちの内部に、ほんとうに生きつづけることがないのはいうまでもありませんが、そのためには、では、つぎにどういうことが考えられなければならないでしょうか。

印刷された文学のばあいでも、児童文学が分化した形で出現したのは、せいぜい百年くらい前のことであって、それ以前は語りもの、つまり、民話や説話などの世界に子供たちは想像力を飛翔させるか、教訓のくりかえしには子供らしい抵抗をして長年月のあいだに選択してきたのです。子供たちに、大人はろくなものをあたえてきてはいないわけです。現在のように、ラジオ・テレビにまでじぶんたちのための番組が組みこまれているなどということは、量だけとってみれば子供たちの歴史にとって漫画本の出現などともあいまって、今世紀は画期的な世紀といえるでしょう。

おおげさな比喻をもちれば、原子力のようにまだ使いかたを本当に知りえないものが、もてあまされながら、日夜子どもたちに番組としてあたえられているとも云えます。わたしの会ったラジオ・テレビのプロデューサーたちは、まったく異口同音に、「子供はきらいだ」「子供はわからない」といっていましたが、それがいつわらない現状です。

しかし、児童文学の分化ということは、たとえばマーク・トウェインやエーリッヒ・ケストナーの描いたような活発そのものの子供たちを生みだしているのにたいして、わが国のばあいには、おびただしい児童文学者たちの出現にもかかわらず、奇妙な専門化が、かえって躍動する子供たちの世界をとらえがたくさせてもいるといえないでしょうか。

一般的に言って、わたしは、大人の世界のリアリティを何らかの独自の形でとらえることができずにいて、子供の

世界だけをとりえることができるなどとは思えません。芸術作品のなかに登場する子供たちの像というのは、それだけで独立した主題となりえますが（たとえば『カラマゾフの兄弟』にはかなりの数の子供たちが登場しているが、その点をとらえてまだほとんど論じられたことはない）、ここでは本題から離れるので、子供たちが登場するしないにかかわらず、子供たちをたいして、子供たちのために、つくられたし、またつくられている作品、に問題をしばらくしなければなりません。

最初へのべたように作者の児童観がまず問題になるでしょうが、それは、じつにあらわに作品のなかからみてとれるということができません。固定した児童観といってもいいでしょう。すぐれた例外があるかもしれないのを、あえていうならば、「永遠の童心」というイメージ（大人の願望）があり、日常的なあまりにも日常生活描写のなかで良識を育成しようとするか、もしくは子供が空想と現実と壁をもうけず偶然を偶然ととらず、異様なものにあくことのない好奇心をしめすのを利用して、刺戟をくわえるためだけに、偶然につぐ偶然、怪奇につぐ怪奇をくりかえして、おそえものの正義心などをつけたすか、そのいずれかに陥ってしまっています。教育者たちは、前者を良心的としてすめようが、子供たちはむしろ後者をよるこぶという現象が、あるときは慨歎のタネになり、あるときは宣伝、販売の成功として、これからもくりかえし起ってくるでしょう。

これからの児童文学の作者たちに望むとすれば、（わたしじしんが創作する場にじぶんをおいて反省してみてもですが）その両者ともに否定して、あたらしい子供のためのものがつくられなければならない、ということになります。

両者を否定的な媒介として新しいイメージをもとめる、ということになります。戦前のデモクラシーの運動の時期に、いわゆる「童心文学」が主張されて、社会矛盾の渦のなかで「永遠の童心」がのぞまれたのはさきにちょっと触れたように、大人の現実には不可能な願望の反映でした。いまは、その童心のうえに、市民社会のモラルを育てよ

うという傾向をになっているのですが、わたしには、それだけに異論はないにしてもそれだけではあまりにも弱々しく、ちょうどデモクラシーじたいがわが国でまだ不徹底、いやそれどころかたびたび危機にひんしている現状をそのまま示しているようにも受けとれます。そしてそういう傾向は、量的にいえば、子供のためのものばあい、もちろん主流となっているとはいえませんが、童心という概念じたい、再検討されなければならないことは最初に述べましたが、それと同時に、子供たちと対置されて大人の巨大な世界、とくに、絶えず子供たちを脅かしているその悪の世界の構造が（最初から善悪の倫理的価値判断をもつてのぞまずにですが）とらえられていなければよしんば童心という概念で尊重しようとしても、リアリティを獲得することになりえない、と思えるのです。

たとえ大人の世界の構造が作品のなかに描きこまれていなくても、主題がそこまで展開をしめていなくても、子供の驚きの眼が、そのようなひろがりやすみつきあたるさまを、作者はすくなくともとらえていなければならぬと、わたしは思うのです。

しかし、いまのところ、そのような作品は、メディアのいかにかかわらず、じつに乏しい。むしろ逆にデモクラシーなどど吹く風の活劇が、人気をかくし良識あるひとびとの響登をよそに、いっかな衰えようとしていないようです。わたしは、いわゆる残酷さの悪影響を、けっして過大には考えないものですが（民話や伝説にだってあつからんとした残酷さは数少ないとはいえないでしょう）、ただラジオ・テレビなどに近頃わりあい見られるところの、暗いショーヴィニズムの本能をかきたてようとする傾向（たとえば「月光仮面」における非国民的といった仮想敵の設定などなど）は、みのがすことができませぬ。それは明らかに大人の観念の植えこみ以外のなものでもなく、悪影響があるとすれば、許しがたい悪影響をもたらすものかもしれませぬ。しかも十年以上も前に、われわれが惨憺たる体験をしたこの陰鬱な排外主義の再出現は、笑いのなさ、ユーモアの欠如と無関係ではないのです。

ラジオやテレビの番組が、漫画に原本を負うていることが多いにもかかわらず、くすぐり以外の笑いが無いというのは、どういうことでしょうか。深刻な葛藤のなかで君臨していたものが、突如として笑いの対象に転化する、……

子供たちの未来がひらけてくるのはいわばそのときなの……。

もともと無意味な道具や行為に、おそえものの正義や愛国心が、意味づけとしてくわえられるのではなく、もったいぶった表情で横行している正義とか愛国心とかいったものが、一瞬一瞬、まるでナンセンスにみかえされてゆくのでなければ、笑いは養われません。子供たちに潜在している奔放な笑いのエネルギーは、対象をみいだすことなく、その想像は片よってしまいう結果となるでしょう。

子供たちに人気のある番組について、わたしは現状でのふたつの点、すなわち、ショーヴィニズムの萌芽と笑いの欠如（だから逆に恐怖の刺激の過多）をあげてみたのですが、さらに子供たちにあたえられているものがそうなっている根源から、もうすこし考えてみなければならぬと思います。

さきに、偶然を偶然ととらず、異様なものにあくことのない好奇心をしめす、そういう子供たちのことをのべましたが、偶然とか、異様なものとかはどう考えたらよいのでしょうか。

偶然というのは、あくまで現在の行為に即していうことであって、それが過去のこととしてふりかえられれば、ただちに因果の系列に組みこまれるといえます。そして、「子供は本質的に現在である」。そこに子供の弱さもあれば強さもあり、われわれは、たんに子供番組に必然性がないといって非難して、退屈な現実の因果関係をなぞるところまで退いてはなるまい、と思います。

因果関係のきびしさを避けるところからはじめず、またその模写をもせず、現在の行為の場で、気がつかなくても、事実われわれの生命がさまざまな脅威にかこまれているごとく、事物に向かい、事物にはたらきかけるほかはありません。そのとき、ことさら異様なものをもちこまなくとも、ありふれたものが、驚きに値するものとみえてくることもあるであろうし、もし異様なイメージが出現するとすれば、それは現代社会の現実根ざしたリアリティのある奇怪さにまで見通されなければならぬでしょう。